丹後機業の動き

市況は低迷したままであるが、白生地生産は増産傾向で推移している

○丹後の年間白生地生産数量は、昭和48年(1973年)の「920万反」をピークに以後減産が止まらず、平成18年に91万反と往時の1/10にまで落ち込み、その後僅か3年で50万反と1/20近くにまで縮小した。しかし、平成22年は原材料の大半を占める中国からの輸入生糸の糸価が上がり続けているため、原料高による仮需により前年を上回るペースでの生産が続いている。

○現状の和装実需に対する在庫を含めた供給量はどれ程の量で需給バランスがとれているかは不明で、50万反が生産数量の底であるかは、機業により意見が異なる。成人式の振袖をはじめとして、七五三・冠婚葬祭等における和装需要は今後も確実に存在し、仕事で和装を制服とする方や愛好家も多い。また、レンタル対応や若年層への和装の魅力発信、リピーターの増など、需要掘り起こしの如何によっては、需給バランスの数量を引き上げることも可能である。

○生産面においては西陣と同様に織り手の高齢化から多様な織注文に技術的に対応できる機屋が少なく、また、ダイレクトジャガードの老朽化による故障も増えており、生産基盤の脆弱化が懸念されている。

○低迷する和装市況にあって、販路拡大や新商品の開発に積極的に取り組む機業もある。例えば、丹後の若手後継者が東京新宿の染めのまち落合で江戸時代から伝わる染色文化を継承、紹介、応援するグループ「落合ほたる」と連携し、新たに製作した作品や丹後の素材を展示・販売する「落合ほたる・丹後ほたるのコラボ展」や国内市場が厳しさを増す中、ヨーロッパの国際的な生地の展示会へ出展し、海外へ販路開拓を展開する等、展示・販売会を各地で開催している。また、丹後の機業数社が帝人グループが開発した植物由来耐熱性バイオプラスチック繊維を使って共同開発した生地は、新たな製織製品として期待されている。この低迷期を切り抜け、産地が生き残っていくためには、消費者や業界を納得させる「価値あるものづくり」を目指した腰の座った取組を継続していく必要がある。

（調査時期：平成２２年１１月上旬 ～１１月中旬）
（調査機関：(財)京都産業２１ 北部支援センター）

【ちりめん（白生地)】

●平成22年(1月～10月)の生産数量は、42.5万反で、前年比103.1%(無地121.7%・紋98.7%)となった。今年は年初より昨年の減産の反動からか前年同月比を上回る月が多く、特に無地では10ヶ月連続で対前年を上回った。実需期に入った９月以降、特に10月については、無地で前年比126%、紋でも112%と前年を上回る生産があった。これらは原料高による仮需であると思われ、全般的には商品の販売が好調であるわけではないため、先行き不透明感は強い。しかしながら、白生地は昨年までの減産の影響により在庫状況は薄いと感じられる。

●財務省の貿易統計によると、平成22年(1月～9月)の小幅白生地輸入数量(無地及び紋)は30.4万反で前年比103.1%と増加している。国内・海外とも生産能力の減少が目立って来ているために先行需要は不透明であるものの、原材料の先高感から丹後産地と同様に前年比を上回った。特に無地では9月は前年同月比を4割超える増加となった。

●現行の受注状況は、受注生産に大きくシフトしている。産地受注の大半は、小ロットで、売れた商品の補充といったケースも多いようである。生地価については、原料の生糸の価格が上昇し続けており、販売価格中心の動きから、先行き需要が期待できない中でその価格転嫁は難しく、原料高・製品安の傾向が一層強まっている。しかし、こうした中にあって、全国規模で多品種・小ロット注文等に細かく対応する機業には、問合せや引合いは来ており、前年を上回る生産量を維持しているところもある。

【帯　地】

●平成22年(1月～8月)の西陣帯地生産数量は、56.2万本で前年比110.9%となっている。しかしながら、推定出荷金額については、119億29百万円と前年比95%にとどまっている。

●実需期にも関わらず、流通在庫の多さから市況は悪く、中・高額レーンが苦戦している。

●産地生産は全体的に減産が続いているが、振袖用の値頃品・ハデ物で比較的健闘している機業も一部にある。

【広幅織物】

●服地では、ポリちりは定番品であった無地の二越ちりめんが極端に減少しており、代わりに緯糸に弱撚糸又は他繊維と混撚して表面変化をつけたものに変わってきている。現状の消費動向等から見て、ポリちり製品は引き続き先細り状態にあるものの、下げ幅は前年より緩やかになっている。

●ネクタイは、中国産が現市場の６～７割を占め、量・価格の両面で国内業界に大きな影響を及ぼしており、今後、中国産とは明確に差別化された商品開発が急がれるところである。

●カーシートは、エコカー補助金打切りの影響により9月に極端に受注が落ち込んだが、減税はまだ継続中であることから10月は少し持ち直した。

【小物他】

●風呂敷では、綿を中心にブランド力をもった製品は静かなブームとなっているものの、丹後の主力である正絹、レーヨンでは共に低迷が続いている。

●帯揚・衿等の和装小物は、和装販売の低迷そのままに低位で推移している。